

教職志望意識の変化と教育実習の効果・経験

櫻田 裕美子

【要 旨】

本稿では、一般大学学部における教育実習生を対象としたアンケート調査から、教育実習前後の教職志望意識の変化と、教育実習の効果及び経験との関係を検討した。分析の結果、教育実習の効果と教員志望意識の変化の関連性は高くないことが確認された。他方、教育実習の経験では、教育実習後に教職志望度が高まった群は低下した群に比べて指導教員や指導教員以外の教員との関係が良好であったことを明らかにした。

【キーワード】

教育実習 教職志望意識 教員養成

1. はじめに

本稿は、一般大学学部における教育実習生を対象としたアンケート調査から、教育実習前後の教職志望意識の変化と教育実習の効果及び経験との関係を明らかにすることを目的としている。

教育実習は教員養成において一定の役割を果たしている。例えば山崎（2002）では、教育実習が教職選択に影響を与えることが明らかにされている。さらに先行研究では、教育実習が実習生の教員としての力量にどのような変容をもたらすか、その効果を検討するものや、教育実習の効果と実習校の雰囲気や実習中の活動等といった経験との関連を明らかにするものが蓄積されてきた。前者に関して例を挙げれば、教育実習前後での授業イメージ・教師イメージ・子どもイメージの変容を検討した三島（2007）がある。三島（2007）では、教育実習の経験によって授業のイメージが肯定的、主体的なものになったこと、教師イメージでは「リーダー」についての変容が見られたこと、子どもイメージでは子どものありのままの姿を捉えるようになったことが明らかにされている。また、後者に関して、実習生及び指導教員への調査をもとに効果と経験について検討した米沢（2010）は、経験を実習校の組織風土と指導教員の指導・支援から捉え、実習生の力量形成を効果としてその関連を検討した。その結果、実習校の組織風土と指導教員の指導・支援が、実習生の力量形成に影響を与える可能性を指摘した。しかし、三島（2007）、米沢（2010）をはじめとした先行研究の対象は主に教員養成系大学学部の附属小学校での教育実習であり、初等教育段階を対象としている点や、教育実習を遂行する機関であるという附属学校の存在意義や教員養成系大学学部という教員養成を主とする機関に所属する学生を対象としているという特徴がある。そのため、その効果を教職課程において母校を中心とした実習が行われる中等教育段階まで含めた教育実習研究の知見として一般化することには課題が残る（櫻田 2020, 2021）。

そこで櫻田 (2019a, 2019b, 2020, 2021) は、一般大学学部の教職課程履修者を対象としたアンケート調査から、母校を中心とした、教員養成系大学の附属学校ではない学校、すなわち一般の学校での教育実習の効果と経験について全体像を把握し、学校種 (中学校・高等学校) の違いに着目した分析を行った。しかし櫻田 (2019a, 2019b, 2020, 2021) では、効果と経験の実態の解明に終始し、効果及び実態と教育実習生の意識との関連を検討する視点が不足している。

本稿では、一般大学学部における中学校と高等学校での教育実習経験者のうち、教育実習前後での教職志望意識に変化がみられた者に焦点をあて、教育実習の効果及び経験との関連を検討する。分析に際して、教育実習の効果は、教育実習経験による授業に関する能力、社会人として必要な能力、教員として必要な能力の習得からとらえる。また教育実習中の経験は、実習中に関わった他者 (指導教員、指導教員以外の教員、他の実習生、生徒) との関わりから把握する。

教育実習前後の教職志望意識の変化と、教育実習を通して身につけた力、教育実習での他者との関わりを検討することを通して、教育実習経験の何が教職志望意識と関連があるかその一端をとらえたい。

2. 調査の概要

2-1. 対象者

本稿では、2018年7月から12月まで全国29大学学部の協力を得て実施した一般の学校における教育実習の経験と意識に関するアンケート調査の結果を用いる¹⁾。同調査の回収サンプルは、742である。

今回の分析では、2段階に分けて分析対象者を抽出した。第1段階として、回収サンプルのうち①回答が十分でなかったもの (サンプル数7)、②教員養成系大学1校 (サンプル数7)、③養護教諭として教育実習を実施した者 (サンプル数5)、を除いた。

第2段階では、教職志望意識が変化した者を選択した。アンケート調査では「教育実習前と教育実習後でのあなたの教職志望に対する意識は、以下のどれにあてはまりますか？」という設問に対して、「実習前」と「実習後」それぞれに「教員志望」「教員は選択肢の1つ」「教員志望ではない」から選択を求めた。「実習前」と「実習後」の回答をクロス集計した結果から、教職志望意識が高まった者と教職志望意識が低下した者を選び分けた。

表1は、教育実習前と教育実習後の変化を示したものである。この表の中で実習後に実習前よりも教職意識が高まったグループを「教職志望向上群」、教職意識が低くなったグループを「教職志望低下群」として分類する。以下、サンプル数を説明に用いて、各群の構成を確認する。「教職志望向上群」のサンプル数は、表1においてゴシック体の太字で示している部分の合計である。すなわち、教育実習前に「教員は選択肢の1つ」を選択し教育実習後に「教員志望」を選んだ46、教育実習前に「教員志望ではない」を選択し教育実習後に「教員志望」と回答した4及び「教員は選択肢の1つ」と回答した44の合計94となる。「教職志望低下群」(サンプル99)は、表1において下線を引いて示している人数で構成される。すなわち、教育実習前に「教職志望」を選択し教育実習後に「教員は選択肢の1つ」を選択した44と「教員志望ではない」を選択した8及び、教育実習前に「教員は選択肢の1つ」を選び教育実習後に「教員志望ではない」を選択した47の合計である。以上より、今回の分析のサンプル数は、「教職志望向上群」が94、「教職志望低下群」が99の合計193である。

表1 教職意識の変化

(人)

		教育実習前			合計
		教員志望	教員は選択肢の1つ	教員志望ではない	
教育 実習 後	教員志望	315	46	4	365
	教員は選択肢の1つ	44	143	44	231
	教員志望ではない	8	47	68	123
合計		367	236	116	719

なお、表には示していないが、「教職志望向上群」と「教職志望低下群」の学校種別の割合は、中学校では「教職志望向上群」48.6%、「教職志望低下群」51.4%。高等学校では「教職志望向上群」48.8%、「教職志望低下群」51.2%であった。中学校と高等学校で教育実習後の意識変化の割合はほぼ変わらないことがわかる。

2-2. 属性

本稿の分析対象者193名の属性は、以下の通りである。

表2は、対象者の性別を示している。サンプルとして男性が若干多いことがわかる。「男性」は53.4%、「女性」は46.6%を占める。

表2 性別 (%)

男性	女性	合計
53.4	46.6	100.0 (193)

カッコ内は人数。以下、同様。

表3から、対象者の実習校について確認する。設置者は「国立・公立」が7割を超えており(73.4%)、実習校種は「高等学校」が63.7%を占める。実習期間は「3週間」が61.7%を占め、「2週間」の35.2%、「4週間」の3.1%と続く。実習校種では、「母校」が9割を超える(90.7%)。

表3 実習校 (%)

設置者	国立・公立	私立	合計
	73.4	26.6	100.0 (192)
実習校種	中学校	高等学校	合計
	36.3	63.7	100.0 (193)
実習期間	2週間	3週間	4週間
	35.2	61.7	3.1
実習校種	母校	母校以外	合計
	90.7	9.3	100.0 (193)

表4は、実習教科を表したものである。これをみると、社会科系の科目が多いことがわかる。最も割合が高いのは、「社会」(中学校)で15.0%、以下「地理歴史」(高等学校)13.0%、「公民」(8.8%)と続く。表5からは比較的規模の大きい学校で教育実習を実施していたことがわかる。教員数では「51人以上」が4割を占める(40.4%)。生徒数は「500-999人」が40.2%を占め、「200-499人」(30.7%)と続き、「1000人以上」も20.1%を占める。

表4 実習教科 (%)

中学校	国語	4.7
	社会	15.0
	数学	1.0
	理科	1.6
	音楽	0.5
	美術	3.1
	保健体育	3.6
	技術	1.0
	外国語	5.7
高等学校	国語	4.7
	地理歴史	13.0
	公民	8.8
	数学	3.1
	理科	6.2
	保健体育	6.7
	音楽	2.1
	美術	1.0
	外国語	4.7
	情報	1.0
	農業	4.1
	商業	5.7
	2.6	
合計		100.0 (193)

表5 実習校の規模 (%)

教員数	10人以下	0.5
	11-15人	2.7
	16-20人	3.2
	21-25人	4.3
	26-30人	10.1
	31-35人	9.6
	36-40人	9.6
	41-45人	9.6
	46-50人	10.1
	51人以上	40.4
	合計	100.0 (188)
生徒数	50人以下	0.5
	50-99人	2.1
	100-199人	6.3
	200-499人	30.7
	500-999人	40.2
	1000人以上	20.1
		100.0 (189)

3. 分析結果

3.1. 教育実習の効果

ここでは教育実習の効果を、授業に関する能力、社会人として必要な能力、教員として必要な能力の3つの習得として捉える。これら3つの能力の習得は、教育実習の達成感や教職への適性感を感じる契機となることが想定されるため、教職志望意識の変化との関連性が浮かび上がってくると考える。

3.1.1 授業に関する能力

まずは、教職志望度の変化と授業に関する能力との関係について検討する。表6は、「以下の授業に関する能力は、教育実習の経験でどの程度身についたと思いますか？」という問いに対してどの程度当てはまるかを「とても身についた」=5から「まったく身につかなかった」=1の5段階でたずねた結果について、教職志望向上群と教職志望低下群で平均値の差の検定を行ったものである。

分析の結果、授業に関する能力について、教育実習の前後で教職への志望度が高まった者と低下した者とで、教育実習経験によって身についたと思う内容に差はないことがわかる。設定した19項目全てにおいて、「教職志望向上群」と「教職志望低下群」間で有意な差はみられなかった。

表6 教職意識の変化と授業に関する能力

	教職志望 向上群	教職志望 低下群	
1. 本時の目標を設定する力	4.14	4.20	
2. 授業の流れを作る力	4.35	4.34	
3. 評価の視点を設定する力	3.72	3.65	
4. 学習指導案を作成する力	4.10	3.91	
5. 教材研究をする力	4.36	4.37	
6. 発問をする力	4.18	3.99	
7. 教材を活用する力	4.14	3.97	
8. 学習活動に関する指示を出す力	4.04	3.98	
9. 児童生徒を授業に集中させる力	3.81	3.78	
10. 児童生徒の反応を授業に活かす力	4.15	3.93	
11. 時間通りに授業を進める力	3.93	3.81	
12. 板書をする力	3.87	3.86	
13. 授業中に児童生徒の前で話をする力	4.47	4.34	
14. 授業方法を選ぶ力	3.83	3.72	
15. 授業中に学級をコントロールする力	3.50	3.41	
16. 児童生徒の理解度に合わせて授業を進める力	3.66	3.44	
17. 教育機器を活用する力	3.33	3.06	
18. 自分の授業を評価する力	3.67	3.67	
19. 導入を設定する力	3.85	3.66	

3.1.2 社会人として必要な能力

次に、教職志望度の変化と社会人として必要な能力との関係についてみていく。「以下の社会人として必要な能力は、教育実習の経験でどの程度身についたと思いますか？」という問いに対してどの程度当てはまるかを「とても身についた」=5から「まったく身につかなかった」=1の5段階でたずねた結果について、平均値の差の検定を行ったものを示す（表7）。

表7 教職意識の変化と社会人として必要な能力

	教職志望 向上群	教職志望 低下群	
1. 物事に進んで取り組む力	4.46	4.26	
2. 他人に働きかけ巻き込む力	4.05	3.98	
3. 目標に向かって確実に行動する力	4.50	4.18	**
4. 状況を分析する力	4.17	4.12	
5. 課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	3.93	3.98	
6. 新しいものを作り出す力	3.70	3.56	
7. 自分の意見をわかりやすく伝える力	4.02	4.07	
8. 相手の意見を丁寧に聞く力	4.42	4.41	
9. 意見の違いや立場の違いを理解する力	4.26	4.31	
10. 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	4.30	4.20	
11. 社会のルールや人との約束を守る力	4.41	4.38	
12. ストレスをためないようにする力	3.36	3.11	
13. 目的や課題を明らかにする力	4.07	4.05	

*: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$, ***: $p < 0.001$ 。以下、同様。

分析の結果、教育実習後教職への志望度が高まった者の方が低下した者よりも目標に向かって確実に行動する実行力が身についたと感じていることがわかる。「3. 目標に向かって確実に行動する力」という項目は、「教職志望向上群」の値が「教職志望低下群」よりも有意に高くなっていた。

なお、有意な差がみられたのはこの1項目のみで、その他の12項目については「教職志望向上群」と「教職志望低下群」で差がないことが確認された。

3.1.3 教員として必要な能力

最後に、教職志望度の変化と教員として必要な能力との関係について検討する。表8は、「以下の教員として必要な能力は、教育実習の経験でどの程度身についたと思いますか？」という問いに対して各項目が回答者にどの程度当てはまるかを「とても身についた」=5から「まったく身につかなかった」=1の5段階でたずねた結果について、平均値の差の検定を行ったものである。

分析の結果、教育実習の後に教職への志望度が高まった者は、低下した者に比べて教育実習を通して生徒への興味・関心や愛情を持ち、他の教員との協働性を身につけたと感じていることがわかる。生徒への興味・関心及び愛情に関する項目（「1. 児童生徒に興味・関心をもつ力」「4. 児童生徒に対する愛情」）の値は、「教職志望向上群」の方が「教職志望低下群」よりも有意に高くなっていた。さらに、他の教員との協働性に関する「11. 他の教員と力を合わせて活動する力」という項目でも、「教職志望向上群」の値が有意に高くなっていた。その他の項目では、両群間で有意な差は確認されなかった。

表8 教職意識の変化と教員として必要な能力

	教職志望 向上群	教職志望 低下群	
1. 児童生徒に興味・関心をもつ力	4.70	4.43	**
2. 児童生徒を理解しようとする姿勢	4.72	4.59	
3. 教員として課された任務を果たそうとする気持ち	4.53	4.39	
4. 児童生徒に対する愛情	4.75	4.40	***
5. 児童生徒を理解する力	4.55	4.44	
6. 特別な支援を必要とする子への対応力	3.59	3.42	
7. 課題解決のために努力する力	4.27	4.24	
8. 自発的に行動する力	4.27	4.27	
9. 学級づくりの力	3.76	3.47	
10. 集めた情報を活用する力	3.96	3.91	
11. 他の教員と力を合わせて活動する力	4.23	3.59	***
12. 報告・連絡・相談を適切に行う力	4.42	4.31	

以上、教育実習の効果を授業に関する能力、社会人として必要な能力、教員として必要な能力の習得としてとらえ、教職志望意識の変化との関係を検討してきた。分析の結果、3つの教育実習の効果と教職志望意識の変化は関連性が低かった。授業に関する能力では、教育実習後教職への志望度が高まった者と低下した者では、教育実習を契機として身についたと思う能力に全く差がみられなかった。社会人として必要な能力では、目標に向かって行動する実行力のみ、教員として必要な能力では、児童生徒への興味・関心及び愛情、そして他の教員との協働性について、

教育実習後教職への志望度が高まった者の方が低下した者に比べてこれらの能力が身についたと感じているにとどまった。

3.2 教育実習の経験

次に、教職志望意識の変化と教育実習中の経験との関係を検討する。ここでは、教育実習中の経験を、他者（指導教員、指導教員以外の教員、他の実習生、生徒）との関わりからとらえる。教育実習期間中、実習生は多くの他者と関わる。これらの人々との関わりが教職志望意識の変化とどのような関係にあるのかを検討していこう。

3.2.1 指導教員

最初に、教職志望度の変化と指導教員との関係を検討する。表9は、「教育実習中の指導教員との関係に関する以下の項目は、どの程度あてはまりますか？」という問いに対して「とてもあてはまる」=5から「まったくあてはまらない」=1の5段階でたずねた結果について、教職志望向上群と教職志望低下群で平均値の差の検定を行ったものである。

分析の結果、教育実習後に教職への志望度が高まった者は低下した者に比べて指導教員との関係が良好で、実習生に寄り添った指導を受けており、実習遂行のサポートや他者との関わりへの支援を受けたと感じていることがわかる。指導教員との良好な関係を示す項目（「3. 指導教員とよく雑談をした」、「4. 指導教員と積極的にコミュニケーションをとった」、「5. 指導教員は、いつもにこやかに接してくれた」）は「教職志望向上群」の値が「教職志望低下群」よりも有意に高かった。加えて、指導教員との不快な関わりに関する項目（「16. 指導教員に不快な思いをさせられることがあった」、「17. 指導教員からハラスメントを受けた」）は、「教職志望向上群」の値が「教職志望低下群」よりも有意に低かった。加えて、実習生に寄り添った指導に関する項目（「2. 指導教員の指導は、丁寧だった」、「6. 指導教員の指導は、一貫していた」、「7. 指導教員は、自主性を尊重してくれた」、「8. 指導教員は、様々な経験をさせようとしていた」）において「教職志望向上群」の値が「教職志望低下群」よりも有意に高かった。さらに、実習を遂行する際に必要な情報提供に関する項目（「11. 指導教員は、実習校の様子を詳しく説明してくれた」、「12. 指導教員は、教育機材の使い方を詳しく教えてくれた」）、教育実習生と他者との関わりへのサポートに関する項目（「14. 指導教員は、指導教員以外の先生達と関わる機会を作ってくれた」、「15. 指導教員は、児童生徒と関わる機会を作ってくれた」）においても「教職志望向上群」の値が「教職志望低下群」よりも有意に高かった。

これらの他にも、教育実習後教職への志望度が高まった者は、指導教員が教職の先輩、社会人の先輩として、自身の経験を話したり社会人としてのマナーなどを伝えたりしたと感じている。これらに関する項目である「1. 指導教員は、自身の教育経験を話してくれた」、「13. 指導教員は、社会人として必要なルールやマナーを教えてくれた」の値は、「教職志望向上群」の方が「教職志望低下群」よりも有意に高かった。

表9 教職意識の変化と指導教員との関係

	教職志望 向上群	教職志望 低下群	
1. 指導教員は、自身の教育経験を話してくれた	4.64	4.11	***
2. 指導教員の指導は、丁寧だった	4.74	4.16	***
3. 指導教員とよく雑談をした	4.43	3.66	***

4. 指導教員と積極的にコミュニケーションをとった	4.56	4.12	**
5. 指導教員は、いつもにこやかに接してくれた	4.56	3.75	***
6. 指導教員の指導は、一貫していた	4.62	4.16	**
7. 指導教員は、自主性を尊重してくれた	4.66	3.97	***
8. 指導教員は、様々な経験をさせようとしていた	4.68	4.25	**
9. 指導教員の指導は、厳しいものだった	3.12	3.35	
10. 指導教員には、気軽に相談に乗ってくれる雰囲気があった	4.44	3.68	***
11. 指導教員は、実習校の様子を詳しく説明してくれた	4.28	3.45	***
12. 指導教員は、教育機材の使い方を詳しく教えてくれた	4.20	3.33	***
13. 指導教員は、社会人として必要なルールやマナーを教えてくれた	4.29	3.81	**
14. 指導教員は、指導教員以外の先生達と関わる機会を作ってくれた	4.27	3.83	*
15. 指導教員は、児童生徒と関わる機会を作ってくれた	4.69	4.13	***
16. 指導教員に不快な思いをさせられることがあった	1.35	2.13	***
17. 指導教員からハラスメントを受けた	1.11	1.63	***

3.2.2 指導教員以外の教員

次に、教職志望度の変化と指導教員以外の教員との関係を検討する。「教育実習中の指導教員以外の教員との関係に関する以下の項目は、どの程度あてはまりますか?」という問いに対して「とてもあてはまる」=5から「まったくあてはまらない」=1の5段階でたずねた結果について、平均値の差の検定を行ったものを表10に示す²。

分析の結果、教育実習後教職への志望度が高まった者は低下した者に比べて指導教員以外の教員との関係が良好であること、指導教員以外の教員から指導を受けていること、実習遂行のサポートを受けたと感じていることがわかる。指導教員との良好な関係を示す項目（「3. 指導教員以外の教員とよく雑談をした」、「4. 指導教員以外の教員と積極的にコミュニケーションをとった」、「5. 指導教員以外の教員には、気軽に相談に乗ってくれる雰囲気があった」）は「教職志望向上群」の値が「教職志望低下群」よりも有意に高かった。指導教員以外の教員からの指導に関する項目（「2. 指導教員以外の教員が指導をしてくれた」）においても「教職志望向上群」の値が「教職志望低下群」よりも有意に高かった。さらに、実習を遂行する際に必要な情報提供に関する項目（「6. 指導教員以外の教員が、実習校の様子を詳しく説明してくれた」）においても「教職志望向上群」の値が「教職志望低下群」よりも有意に高かった。

表10 教職意識の変化と指導教員以外の教員との関係

	教職志望 向上群	教職志望 低下群	
1. 指導教員以外の教員が、自身の教育経験を話してくれた	4.36	4.20	
2. 指導教員以外の教員が、指導をしてくれた	4.43	4.12	*
3. 指導教員以外の教員とよく雑談をした	4.31	3.91	*
4. 指導教員以外の教員と積極的にコミュニケーションをとった	4.41	4.00	**
5. 指導教員以外の教員には、気軽に相談に乗ってくれる雰囲気があった	4.36	3.98	*
6. 指導教員以外の教員が、実習校の様子を詳しく説明してくれた	4.10	3.60	**
7. 指導教員以外の教員が、社会人として必要なルールやマナーを教えてくれた	4.06	3.82	
8. 指導教員以外の教員に不快な思いをさせられることがあった	1.49	1.66	
9. 指導教員以外の教員からハラスメントを受けた	1.23	1.39	

3.2.3 他の実習生

ここでは、教職志望度の変化と他の実習生との関係を検討する。表11は、「実習生（同じ学校で実習を行った人）に関する以下の項目は、どの程度あてはまりますか？」という問いに対して「とてもあてはまる」=5から「まったくあてはまらない」=1の5段階でたずねた結果について、平均値の差の検定を行ったものである。

分析の結果、教育実習によって教職への志望度が高まった者は低下した者に比べて他の実習生と学び合う姿勢があったと感じていることがわかる。教育実習生は、お互いの授業を参観することで自分の授業を振り返る契機としたり、授業者に対してコメントすることによって授業のレベルアップに貢献したりする。このような関係性を示す項目「1. 他の実習生が自分の授業を見に来た」という項目の値は「教職志望向上群」の方が「教職志望低下群」よりも有意に高かった。

なお、この項目以外で両群間に有意な差がみられたのは、教育実習生と指導教員の関係性に関する「9. 実習生は指導教員との関係が良好だった」のみであった。教育実習によって教職への志望度が高まった者は低下した者に比べて指導教員との関係性が良好だったと感じている点は、上述の指導教員との関係性について検討した結果（「3.2.1 指導教員」）と同様の結果を確認することができた。

表11 教職意識の変化と他の実習生との関係

	教職志望 向上群	教職志望 低下群	
1. 他の実習生が自分の授業を見に来た	4.46	3.94	**
2. 他の実習生とお互いの授業準備を手伝った	3.79	3.82	
3. 他の実習生が自分の授業へコメントをした	4.27	4.00	
4. 実習に関する悩みを相談し合える雰囲気があった	4.55	4.47	
5. 他の実習生と児童生徒に関する話をした	4.45	4.36	
6. 他の実習生と雑談をした	4.55	4.78	
7. 他の実習生とプライベートで食事に行った	3.42	3.48	
8. 他の実習生と進路に関する話をした	4.35	4.39	
9. 実習生は指導教員との関係が良好だった	4.42	4.05	**
10. 実習生は児童生徒との関係が良好だった	4.59	4.48	

3.2.4 生徒

最後に、教職志望度の変化と生徒と関係を検討する。表12は、「教育実習中の児童生徒との関係に関する以下の項目は、どの程度あてはまりますか？」という問いに対して、「とてもあてはまる」=5から「まったくあてはまらない」=1の5段階でたずね、平均値の差の検定を行った結果を示している。

分析の結果、教育実習後に教職への志望度が高まった者は教職志向度が低下した者に比べて、授業以外に交流の時間をもっていたことがわかる。実習生が授業以外の自由なで子どもたちと過ごす機会は、昼食時や昼休み、放課後などに限られる。それらの時間を子どもたちと過ごすかどうかは、実習生自身や指導教員、指導教員の考えや実習生自身の意欲に委ねられる。昼食時や昼休み等休憩時間の過ごし方についてたずねた項目「1. 児童生徒と休憩時間等と一緒に遊んだ」では、「教職志望向上群」の値が「教職志望低下群」よりも有意に高くなっていた。しかしながら、この項目以外では両群間で有意な差は認められた項目はなかった。教育実習の経験による教職意識の変化と生徒との関わりにおいて、両群間を明確に分ける要素は少ないことがうかがわれる。

ここまで教育実習中に関わる他者として、指導教員、指導教員以外の教員、他の実習生、生徒を設定し、教職志望意識の変化との関係を検討してきた。分析の結果、教員との関係性が確認されたといえよう。教育実習後教職への意識が高まった者は、低下した者に比べて指導教員との関係が良好であり、実習生に寄り添った指導を受けたと感じていた。また指導教員以外の教員との関わりや指導も両群間で差異が確認された。

表12 教職意識の変化と生徒との関係

	教職志望 向上群	教職志望 低下群	
1. 児童生徒と休憩時間等に一緒に遊んだ	3.74	3.27	*
2. 児童生徒の相談に乗った	3.95	3.69	
3. 授業やHRで関係のある児童生徒の名前を覚えた	4.49	4.56	
4. 児童生徒とほとんど話をしなかった	1.36	1.54	
5. 児童生徒が興味関心を持つ事柄を把握しようとした	4.44	4.23	
6. 授業以外で、積極的に児童生徒を指導した	3.93	3.71	
7. 児童生徒にバカにされたと感じた	1.60	1.66	
8. 児童生徒から授業の内容について質問を受けた	3.85	3.89	

4. おわりに

本稿では、一般大学学部における教育実習の経験と意識に関するアンケート調査の結果から、教育実習前後の教職志望意識の変化と教育実習の効果及び教育実習中の経験について検討した。分析の結果、明らかになったのは、以下の2点である。

①教育実習の効果と教育実習前後の教職志望意識の変化において、設定した3つの能力伸長と、教育実習前後で教職への意欲が高まった者と低下した者との間での差は小さいことが明らかとなった。授業に関する能力では、その習得意識において教育実習によって教職への志望度が高まった者と低下した者で差はみられなかった。社会人として必要な能力では、教育実習によって教職への志望度が高まった者の方が、目標に向かって確実に行動する実行力を身につけたと感じていた。教員として必要な能力では、教員志望度が高まった者は、低下した者よりも生徒に興味関心や愛情を持ち、他の教員との協働性を身につけたと感じていた。

②教育実習中の経験と教育実習前後の教職志望意識の変化において、教員との関連が大きいことが明らかとなった。教育実習後に教職への志望度が高まった者は低下した者に比べて指導教員との関係が良好で、実習生に寄り添った指導を受けており、実習遂行のサポートや他者との関わりの支援を受けたと感じている。また指導教員以外の教員との関わりや指導においても教育実習によって教職への志望度が高まった者と低下した者で有意な差がみられた。

今回、教育実習前及び教育実習後の教職志望意識の変化を捉え、教育実習によって教職志望意識が高まった者と低下した者が教育実習でどのような能力が身についたと感じているか（教育実習の効果）、実習中に他者とどのような関わりをしているか（教育実習の経験）を検討した。印象的だったのは、教育実習中に関わる他者において、それがどのような人であるかと、教育実習前後の教職志望度の変化との関係に違いが確認されたことである。有意な差が多く確認されたのは、指導教員及び指導教員以外の教員との関わりにおいてであった。他方、他の実習生との関わりや生徒との関わりではあまり両者間での差はみられなかった。

本稿は、教育実習における指導教員や指導教員以外の教員といった実習校の先生が教職志望意識の変化に影響を与える存在であることが伺われる結果を導き出した。しかし、今回の分析は相関関係を検討したに過ぎない。今後は、特に指導教員のどのような関わりや指導が実習生にいかん認識され、教職志望意識の変化に影響を与えるのか、その因果関係について検討していきたい。

注

- 1 アンケート調査実施の協力を得た29大学は以下の通り（順不同）。大正大学、西南学院大学、旭川大学、八戸学院大学、宮崎産業経営大学、福岡工業大学、九州国際大学、藤女子大学、拓殖大学、筑紫女学園大学、八戸工業大学、鹿児島国際大学、久留米大学、広島経済大学、志学館大学、宮崎大学工学部、九州共立大学、近畿大学産業理工学部、九州産業大学、室蘭工業大学、松山大学、北海道教育大学札幌校、札幌大谷大学、札幌学院大学、北里大学、愛知大学、南九州大学、立命館大学、京都女子大学。
- 2 なお指導教員以外の教員は指導教員と異なり、直接実習生の指導をする立場にはないことを考慮し、指導の内容を掘り下げる質問項目は除き、指導以外の側面をたずねる項目を配置した。

参考文献・資料

- 阿形健司, 1997, 「教育実習後の教職志向に関する一考察」, 愛知教育大学教科教育センター, 『愛知教育大学教科教育センター研究報告』, 21, pp.109-114。
- 一般社団法人全国私立大学教職課程協会研究委員会 教職課程カリキュラム部会編, 2018, 「『教育実習及び現場体験活動に関する実態調査』結果報告書」, 一般社団法人全国私立大学教職課程協会。
- 飯野晴美, 1995, 「教育実習に関する調査」, 『明治学院論叢』, 559, 明治学院大学, pp.181-189。
- 川合春路, 2004, 「第2章 教育実習の準備と心得」, 山崎英則編著, 『教育実習完全ガイド』, ミネルヴァ書房, pp.10-18。
- 河野通夫・神戸忠夫, 1991, 「教育実習による学生の意識変化について—アンケート調査の結果を通して—」, 京都産業大学, 『京都産業大学論集, 人文科学系列』, 18, pp.314-331。
- 教育職員養成審議会, 1997, 「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第一次答申）」, (http://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/1315369.htm : 2020年2月12日)
- 国祐道広・西川信広, 1984, 「教育実習の指導実態と指導教員の意識—小・中学校を中心として」, 大谷女子大学志学会, 『大谷女子大学紀要』, 19 (1), pp.120-155。
- 紅林伸幸・川村光, 2001, 「教育実習への縦断的アプローチ—大学生の教職志望と教師化に関する調査研究 (2) —」, 滋賀大学教育学部, 『滋賀大学教育学部紀要, 1, 教育科学』, 51, pp.77-92。
- 経済産業省中小企業庁, 2018, 「『我が国産業における人材力強化に向けた研究会 (人材力研究会)』報告書」, (http://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001_1.pdf : 2020年2月10日)
- 小山茂喜, 2018, 『よくわかる教職シリーズ 教育実習 安心ハンドブック』, 学事出版。
- 櫻田裕美子, 2013, 「教育実習の成果と課題」, 宮崎産業経営大学, 『宮崎産業経営大学研究紀要』, 24 (1), pp.33-44。
- 櫻田裕美子, 2014a, 「教育実習とそこに至る学び」, 『これからの学校教育と教師—「失敗」から学ぶ教師論入門—』, ミネルヴァ書房, pp.11-22。
- 櫻田裕美子, 2014b, 「一般大学学部における教育実習の効果—教職志望意識の変化に着目して—」, 宮崎産業経営大学教職課程, 『宮崎産業経営大学教職課程年報』, 7, pp.17-25。
- 櫻田裕美子, 2014c, 「一般大学短期大学における教育実習の実態」, 全国私立大学教職課程研究連絡協議会, 『教師教育研究』, 27, pp.130-140。
- 櫻田裕美子, 2017, 「一般学校における教育実習に関する予備的考察」, 宮崎産業経営大学教職課程, 『宮崎産業経営大学教職課程年報』, 10, pp.15-21。
- 櫻田裕美子, 2019a, 「教育実習における経験—「教育実習生の経験・意識に関する調査」から—」, 宮崎産業経営大学,

『宮崎産業経営大学研究紀要』, 29 (2), pp.45-63。

櫻田裕美子, 2019b, 「教育実習に係る活動と実習中の他者との関わり及び教育実習の効果ー「教育実習生の経験・意識に関する調査」からー」, 宮崎産業経営大学教職課程, 『宮崎産業経営大学教職課程年報』, 12, pp.21-33。

櫻田裕美子, 2020, 「一般大学学部における教育実習の多様性と効果ー高校に注目してー」, 宮崎産業経営大学教職課程, 『宮崎産業経営大学教職課程年報』, 13, pp.5-31。

櫻田裕美子, 2021, 「一般大学学部における教育実習の経験と効果ー中等教育段階(中学校と高校)における相違点ー」, 宮崎産業経営大学, 『宮崎産業経営大学研究紀要』, 31 (1・2), pp.1-20。

櫻田裕美子, 2022, 「コロナ禍における教育実習に関する一考察」, 別府大学, 『別府大学紀要』, 63, pp.57-71。

次世代教員養成研究会, 2016, 『次世代教員養成のための教育実習ー教師の初心をみがく理論と方法ー』, 学文社。

柴田義松・木内剛編著, 2015, 『教育実習ハンドブック』, 学文社。

武内清・深谷野亜, 1993, 「一般大学における教育実習の効果ー上智大学の場合ー」, 上智大学文学部教育学科, 『上智大学教育学論集』, 28, pp.81-108。

中央教育審議会, 2005 「新しい時代の義務教育を創造する(答申)」

(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212703.htm : 2020年1月15日)

都築暢也, 2014, 「教育実習校における教育実習の諸課題ー教育実習生と指導教諭を対象としたアンケート調査に基づいてー」, 中京大学国際教養学部, 『中京大学教師教育論叢』, 4, pp.29-47。

中田正弘・伏木久始・鞍馬裕美・坂田哲人, 2014, 「教育実習生及び初任者・若手教員の指導を担当する教員に関する現状と課題」, 信州大学教育学部, 『信州大学教育学部研究論集』, 7, pp.31-46。

春原淑雄, 2007, 「教育学部生の教師効力感に関する研究ー尺度の作成と教育実習にともなう変化ー」, 日本教師教育学会, 『日本教師教育学会年報』, 16, pp.98-108。

姫野完治, 2003, 「教育実習の実態に関する基礎的研究ー教職志望学生への質問紙調査を通してー」, 秋田大学教育文化学部附属教育実践研究指導センター, 『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』, 25, pp.89-99。

藤井泰・作田良三編, 2012, 『松山大学地域研究センター叢書 第11巻 地域発展を担う教師の養成段階における能力形成過程』, 松山大学総合研究所。

二川正浩, 2014, 「第4章 教育実習の実際 3. 学習指導の実際」, 『新版 教育実習安心ハンドブック』, pp.124-162。

別惣淳二, 2004, 「教育実習生の学びの過程に関する一考察ー「教師として成長したと思うこと」の記述分析を通してー」, 中国四国教育学会, 『教育学研究紀要』, 50 (1), pp.178-183。

別惣淳二・千駄忠至・長澤憲保・加藤久恵・渡邊隆信・上西一郎, 2007, 「卒業時に求められる教師の実践的資質能力の明確化ー小学校要因養成スタンダードの開発」, 日本教育大学協会第二常置委員会, 『日本教育大学協会研究年報』, 25, pp.95-108。

三島知剛, 2007, 「教育実習生の実習前後の授業・教師・子どもイメージの変容ー実習生のレジリエンスに注目してー」, 広島大学大学院教育学研究科, 『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 学習開発関連領域』, 56, pp.77-83。

三島知剛, 2008, 「教育実習生の実習前後の授業観察力の変容ー授業・教師・子どもイメージの関連による検討ー」, 日本教育心理協会, 『教育心理学研究』, 56 (3), pp.341-352。

三島知剛, 2009, 「教育実習の他者との関わりと教育実習生の授業・教師・子どもイメージ、授業観察力の変容」, 日本教育工学会, 『日本教育工学会論文誌』, 33 (1), pp.71-81。

宮崎大学教育学部附属小学校HP「本校の設置目的及び使命」(<https://www.miyazaki-u.ac.jp/fes/page-2188/page-2212/>, 2022年1月27日)

溝邊和成・内藤博愛, 2008, 『最新!教育実習「実践」マニュアルー目からウロコの10か条』, 明昌堂。

南本長穂・善明宣夫, 2004 「教育実習の研究(II)ー実習生の生活と達成感を中心としてー」, 関西学院大学教職教育研究センター, 『教職教育研究』, 9, pp.11-26。

宮崎猛・小泉博明編著, 2015, 『教育実習完璧ガイド』, 小学館。

文部科学省総合教育政策局教育人材政策課, 2019, 「教員免許状の授与状況(2)」, 『教育委員会月報』, 837, 第一法規, pp.21-32。

安直哉, 2002, 「教育実習の実際」, 岐阜大学教育学部, 『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』, 51 (1), pp.23-34。

- 山崎準二, 2002, 『教師のライフコース研究』, 創風社。
- 山崎準二, 2012, 『教師の発達と力量形成一続・教師のライフコース研究一』, 創風社。
- 山口県教育委員会, 2013, 「教育実習実施に当たってのガイドライン」(<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a50200/yousei/jissyuuguide.html>, 2017年12月2日)
- 米沢崇, 2007, 「学部生から見た教育実習の意義に関する一考察—数量的分析および質的分析を通して—」, 広島大学大学院教育学研究科、『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 学習開発関連領域』, 56, pp.67-76。
- 米沢崇, 2008, 「実習生の力量形成に関する一考察—実習校指導教員の指導的かかわりとの関連を中心に—」, 日本教師教育学会, 『日本教師教育学会年報』, 17, pp.94-103。
- 米沢崇, 2010a, 「教育実習における教師としての力量形成に対する教職志望学生と初任者の意識の検討」, 奈良教育大学, 『奈良教育大学紀要』, 59 (1), pp.237-244。
- 米沢崇, 2010b, 「教育実習における実習校の組織風土と指導教員の指導・支援の検討」, 奈良教育大学, 『奈良教育大学紀要』, 59 (1), pp.245-251。
- 米沢崇, 2010c, 「実習校指導教員の役割と指導・支援に関する検討—A大学附属の小学校の指導教員と教育実習生を対象とした質問紙調査の結果を中心に—」, 日本教育実践学会, 『教育実践学研究』, 11 (2), pp.11-20。

[付記]

本稿は、令和元年～3年度日本学術振興会科学研究費補助金「基盤研究（C）」（課題番号：19K02491）による研究成果の一部である。

